

山西省孟県仙人村調査報告

～「個人史から考える日中近現代関係史」の一環として～

The Report of Xianren Village Research as a Part of
Reevaluation of Japan-China Relationship in the Modern Era
from the Viewpoint of Individual History

田 宮 昌 子

小稿は、研究課題「個人史から考える日中近現代関係史」の一環である。本研究では日中戦争に従軍した日本軍将兵の遺品を、主に中国山西省に駐屯した時期の写真を中心に、広く社会に共有される史料とすべく、裏付け調査と現在の視点からの考察を加えて公開しようとする。

研究過程では、遺品として21世紀初頭の今日まで残った、20世紀初頭から中葉までの記録を留める品々を個人の私有物から社会に共有される史料とすべく、裏づけ作業を加えて来た。遺品群を単なる色あせた標本としないために、日本での現地調査を通して現在との対話を、中国での現地調査を通して被写体とされた社会との対話を試みている。

中国での現地調査は、本研究課題の出発点となる遺品を遺した故人の主な駐屯地である山西省孟県を中心に行っている。本稿はそのうち孟県東部農村において、2010年9月、11年4月の2回に亘って行った仙人村調査について報告する。

キーワード：日中近現代関係史、山西省、史料、現地調査

目 次

はじめに

一、調査の背景

二、調査の概要

三、抗日戦争期の仙人村

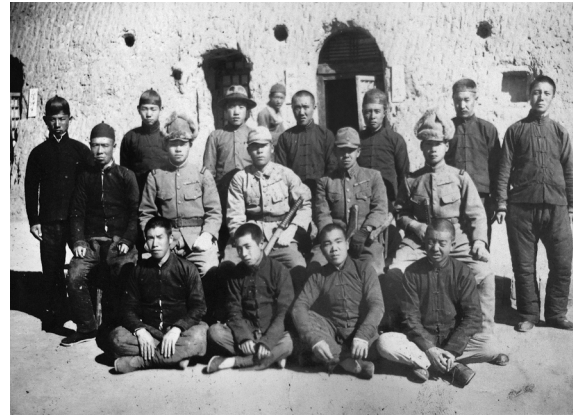
四、聞き取り調査

むすびにかえて

「東会里維持会」との記念撮影

資料2は裏面に「東会里差務股長」「維持会長」という2つの肩書きで「李宜春敬贈」とあり、「維持会員」7名の名が書かれている。写真に写る三列にはくっきりと階層がある。中央の椅子席の列が最上階で日本軍人4名（圭川は右から2人目）と「維持会長」（左端）が座る。後ろの立ち席が第二段で、紳士然とした身なりから前列で地面に座っている人々とは異なる上層の階層であることが分かる。この7名が「維持会員」だろう。最前列は肉体労働に従事する階層のようである。山上の警備隊か集落内の「維持会」で雑役を担った人たちのようだ。

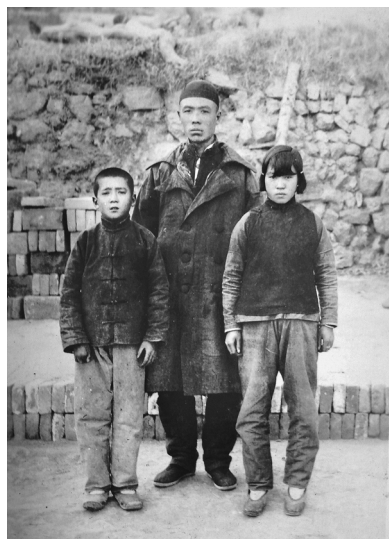
資料2 「東会里維持会」との記念撮影



「隊長大人恵存」

資料3には「田宮隊長大人恵存 股長李宜春敬贈」と裏書がある。「恵存」は書や絵などを贈る際の定型表現で、李宜春が圭川に贈ったものと分かる。資料2と3には撮影日時が書かれていないが、圭川が東会里村を訪れるのは1942年10月26日のみであること、双方に写る李宜春の服装が同じであることから、同日撮影されたものと考えられる⁴。現地調査でこの写真を見てもらうと、東会里村でもすぐに李宜春だと見分けられたし、両脇は息子と娘だと教えてくれた。出身地の仙人村ではより詳細に分かった。息子は李玉川。銃弾で遊んでいて怪我をし、右手が悪かったという。確かに右手が不自由そうに見える。既に亡くなった。娘は李玉娥で、陽泉で暮らしている。孫が李如斌といい、陽泉の中学校で教えている（2011年に聞き取り調査を実施。後述）。

資料3 「隊長大人恵存」



26日に東会里村でこれらの写真を撮影した後、おそらくはトーチカに宿泊したものであろうか、翌27日は東会里警備隊を伴って更に東進し、5.5キロ先にある仙人村を訪れている。圭川は仙人村では集落に立ち入っていないようで、残るのは集落の北にある越霄山での写真のみである。

資料4 「仙人村越霄山 … □□行軍途中」



資料5 越霄山南側斜面



「仙人村越霄山 … □□行軍途中」

資料4には「仙人村越霄山 昭和十七年十月二十七日 □□行軍途中」と裏書がある。山を登っていく一行は約20人に見える⁵。仙人村集落から山の南側斜面を登っていくと、この写真と稜線が重なる（資料5）。頂上には城塞風の囲いと建物が見えるが、現地調査でこれは古廟と周囲にめぐらされていた塀だと分かった。いかにも軍事拠点にあつらえ向きの場所がありながら、目と鼻の先の東会里に新たにトーチカを築いたのは不思議である。老人たちは、日本軍は当初この廟に住もうとしたが（水の調達が？）不便だったので諦めた（東会里・劉&王07.8.30）とか、日本軍がやって来て一晩住んだので、「これはまずい」ということになって八路軍が壊した（仙人村・李志光10.9.5）と話す。村の記録には、日本軍と傀儡軍が越霄山に駐屯するのを防ぐため、44年春に県区政府の決定に基づき、村の民兵が山頂の古廟を破壊したとある⁶。

「標高一〇五六ヨリ敵ヲニラム」

資料4の一行は頂上まで登ると寸劇を演じるかのような記念撮影（資料6）。裏面に「昭和十七年十月二十七日 “仙人村越霄山 標高一〇五六ヨリ敵ヲニラム”」と書かれている。同じ写真が泉アルバム⁷にあり、「東会里分遣隊」と添書がある。前日の東会里警備隊が仙人村まで同行してき

資料6 「仙人村越霄山 標高一〇五六ヨリ敵ヲニラム」



資料7 越霄山頂から北を望む



資料8 「説明ヲ聞ク我輩」



資料9 越霄山頂から仙人村を見下ろす



たと思われるが、12名であれば東会里分遣隊の約半数に当たる。兵士たちの前面に広がる風景は現地調査で越霄山頂から北面を見渡した風景と重なった（資料7）。すると腹ばいになった兵士たちが銃を構える先は、仙人村の北東、つまり晋察冀辺区ということになる。兵士たちの背後で望遠鏡を構えている人物が圭川と思われる。この東部農村視察は一見呑気に見えながら、治安強化運動の一環として八路軍根拠地を目前に控えた東の前線を督励にやって来たものだろうか。

「説明ヲ聞ク我輩」

山上から集落を見下ろす一枚。これもまた構図や配置を意識した記念の一枚なのだろう。右寄り帯刀の人物が圭川と思われる。この一枚は資料6「敵ヲニラム」と同じ頁に上下に貼られているものの、撮影日も地点も記されていないが、泉アルバムに「東会里仙人村」として同じ写真があった。圭川が仙人村を訪れるのは1942年10月27日のみであるため、この写真の撮影日も特定できる。資料9は2010年に越霄山頂から南面の仙人村集落を見下ろしつつ右手に降りた時の一枚。なかなかびたりとは行かないものの、近景の浸食台地と中景の集落、遠景の山脈の三者が資料8と重なるようだ。

三章でみるように、『仙人村志』には、村が如何にして日本軍から身を守ろうとしたか、民兵組織や警戒態勢についての記載がある。日本軍拠点がある東会里村から村に至る経路に見張りを立て、案山子を信号にして、防衛と避難を行っていた。圭川が仙人村にやって来た日は『仙人村志』に襲撃記録はなく、この日は村民の殺害や拉致、物資の強奪などの武力行使が行われなかったようであるが、日本軍が隣村のトーチカを降りて自村に向かってくれば、遺品写真に残る呑気な撮影大会の裏で、この日も案山子が倒され、村では緊迫した警戒態勢が取られたことと思われる。

二、調査の概要

調査地概況

現在の仙人村は山西省陽泉市孟県仙人郷仙人村である。孟県城の東25キロ、陽泉市の南40キロに位置する。総面積は7.85平方キロ、東西に1華里（1華里＝0.5キロ）、南北0.5華里、村は三面

を山に囲まれ、東北が高く、西南に低い。集落の北にある越霄山は仙人村で最も高い山で海拔1311メートル、中腹にある仙人洞が村名の由来である。村民は12姓、451戸1521人である⁸。

調査概要

調査を実施したのは、2010年9月5日と翌11年4月7日である。2007年に山西省での調査を始めた当初から東会里村と共に仙人村を訪れたいと願っていたが、東会里村から東に向かう道路事情が悪いという理由で、孟県城からアテンドしてくれる孟県政府幹部の同意が得られなかった。孟県の農村地帯では共通語はあまり通行せず、公共交通機関もない。外部との接触の少ない小さな集落では外国人に限らず外部からの人間が勝手に動き回って調査をすることは住民の理解を得にくい。更に抗日戦争期の出来事について日本人が調査をするとすると、現地住民に受け入れてもらうための何らかの仕掛けが必要である。筆者が孟県で農村調査に入る際には東会里村も含め、常に県政府関係者の同行の下で入っている。そんな訳で、孟県城から車で1時間とかからないにも関わらず非常に遠かった仙人村であるが、2010年の孟県訪問時には状況が好転しており、ようやく入ることが出来た。思いがけず実現したために態勢が十分でなく、翌春に再調査することとなった。

第1回 2010年9月5日

この時は山西省明らかにする会の訪中団に参加中、会の活動に協力しておられた孟県農村の元小学校教員・張双兵先生の紹介で思いがけず実現した。宿泊していた太原から車で孟県城に向かい、張先生から紹介されたアテンドの孟県政府職員・陳計生氏を県域でピックアップして仙人村に入った。すぐに「孟県仙人郷仙人村村民委員会」に案内される。そこでは李志光氏が待っておられた。村の老幹部で、定年後は村志の編集に携わっている。調査趣旨を説明し始めると、村に日本軍が来た時に越霄山に連れて行かれた少年が存命とのことで委員会の人が呼びに行ってくれる。実に数分でやってきた。李広栄さん84歳。聞き取りを行う。

李志光氏が自宅で昼食を摂りながら、村史を見せてあげようと言って下さる。歩いて数分のところにあるお宅へ。村史を見ながら話を聞いていると、隣は李宜春（後述）が住んでいた家だという話に。写真撮影。その後、集落の北にある越霄山に登り、資料4、6、8の撮影地点を探す。

第2回 2011年4月7日

突然の実現で態勢が不十分であった第1回調査の補足と補強を目的として再訪した。まず、越霄山に直行し、資料4、6、8の撮影地点を再度探し、撮影を行う。下山後は仙人村村民委員会の李志光さん宅へ。『仙人村志』の接写を行う（前回の複写は不鮮明且つ不完全であったため）。その後、李広栄さんに2回目の聞き取りを実施した。

三、抗日戦争期の仙人村

現地調査では仙人村で『仙人村志⁹』（草稿）を見せて頂くことが出来た。内容は村の抗日の闘い

に大きな紙幅が割かれている。村レベルからみた抗日戦争の記録は貴重である。以下、主に『仙人村志』に依りながら、抗日戦争期の仙人村をみていく。

抗日戦期の展開

37年

7月 抗日戦争が勃発。

10～11月 八路軍120師戦地工作団が孟県に至り、団員・党员である薛同良が唐辛子売りに扮して、4回にわたり仙人村に来て工作を展開した。李開成…など7名が共産党に入り、党小組を結成した。

12月 党员は9人に増加…仙人村に初めて党の支部委員会が発足した。

38年

1月9日 日本軍が孟県を占領。

2月 党支部の指導の下、仙人村工人抗日救国会、農民抗日救国会、青年抗日救国会、婦女抗日救国会、抗日自衛隊が組織され、劇団と児童団も結成された。

3月 晋察冀軍区部隊が村にやって来て、近隣の紳士を招集して、抗日のための寄付を働きかけた。部隊の駐屯中に村の青年高三苗など24名が八路軍に加わった。

この年、孟県抗日高小が仙人村に成立した。

39年

孟県抗日政府が「減租減息換租掲約」の単行条例を公布¹⁰。仙人村党支部は大衆を指導して「減租減息」工作を展開、「大衆の抗日の情熱を大いに高めた」。

8月26日 日本軍が東会里村を占領。（筆者注：東会里村集落の北にある）洋馬山にトーチカを建設、拠点を設置した。

8月30日 東会里拠点の日本軍が初めて仙人村を襲撃。放火、殺人、略奪を行った。

40年

6月6日 晋察冀四分区五団が仙人村の南山で東会里からやってきた日本軍と終日激戦。村人は水や食料を提供した。この戦闘では日本軍8人を射殺、20人に重傷を負わせた。

8月20日 百団大戦が始まる。朱徳総司令、彭徳懐副総司令の命令に基づき、華北軍民は日本軍交通線に総攻撃を展開。

9月2日 晋察冀軍区19団は東会里日本軍拠点を猛攻、孟県城の日本軍130余人が増援に駆けつけ、戦闘は日暮れまで続いた。日本軍は敗退し、牛村の日本軍と共に全部が県城に撤退した。

41年

4月 日本軍が仙人村に侵入、山南道で村民高吉末と李林義が射殺され、更に高清和が暴行されて重体となった。

5月14日 東会里拠点の偽軍¹¹が仙人村に潜入、孟海虎らの牛を6頭追い立てて行った。東会里で商会会長を務めている仙人村民の李宜春を通じてとりなしてもらい、偽軍の頭目に銀50元

山西省孟県仙人村調査報告～「個人史から考える日中近現代関係史」の一環として～（田宮昌子）

を渡して、ようやく取り戻した。

10月5日 八路軍“火線劇社”が仙人村で抗日演目を上演。

10月6日 日本軍が村の東から仙人村に潜入、佛源寺、家廟、道路沿いの民家など610軒、密洞240余戸を焼き払い、家畜146頭を略奪。村人李雨和、李冬成など4名が殺害された¹²。

12月17日 日本軍が再度潜入、300余軒の家屋を焼いた。全村で40余戸250名が住む家を失った。この年の秋、抗日政府の法令に基づき、仙人村では「統一累進税」を推進、社会各層の抗日負担を公平で合理的なものとし、各層民衆の「抗日への積極性を更に高めた」。

42年

4月20日 朝、日本傀儡勢力が操る反動的会道門「紅槍会」が仙人村を占領し、民衆に入会を強要、東西二堂を設け、人心を惑わして抗日を破壊した。

5月22日 夜、村の民兵が19団と連携して、「紅槍会」を一挙に粉碎し、反動的頭目を鎮圧、惑わされていた民衆を教育した。

8月 日本軍は孟県の抗日根拠地への封鎖と“掃蕩”を強化。闘争の趨勢に対応して、中共冀晋区党委員会は孟県を孟平県・孟陽県、孟寿県の三県とするなど域内を再編¹³。仙人村は平定（路北）県第6区となった。

9月15日 日本軍が村に潜入、村武委会主任高春林を捕え、村の喜神廟の前に連行して拷問、村の党员・幹部および武器弾薬について追求した。高は瀕死状態になったが、日本軍が去った後に村人に救助され一命を取り留めた。

9月25日 日本軍は再度村を襲い、越霄山頂を占領、村民李広栄を連れ去り、仙人村および東庄頭一帯の大量の糧食と財物、家畜を略奪し、10月2日に撤退した。

43年

抗日救国連合会が成立

3月21日 民兵爆弾班が村の入り口の家廟西側に連環地雷4個を仕掛けた。その晩、日本軍が侵入、6人が爆死し、他は東方に逃走、村に入って駐留することを断念した。

毛沢東主席の「自己動手…」の呼びかけに応え、織物工場を起こすなど村での自力更生的生産活動を展開。労武を結合し、秋の大豊作を達成、日偽の経済封鎖を打破した。

9月10日 日本軍が仙人村に侵入、高二元ら8名が射殺された。

10月12日 区長韓計昌が仙人村で平定（路北）県六区群衆大会を開催、二千余名が参加。大会終了後、罪状の大きい漢奸6名を和尚湾で処刑した。

44年

2月5日 日本軍が村に侵入、李徳良、李青和を土塔村に連行し、銃剣で刺殺した。

春 日偽軍が越霄山に駐屯するのを防ぐため、県区政府の決定に基づき、各村の民兵が山頂の古廟を破壊した。

4～7月 村党支部は県委の指示に基づき、反“囤特”（国民党スパイ）運動を展開。

8月30日 東会里拠点の日本軍は抗日軍民の包囲のもと県城に撤退し¹⁴、仙人村は以後二度と日偽軍の侵攻を受けることはなかった。

45年

2月 仙人村完小¹⁵が設立された（筆者注：設立時の教員に李宜春の名が挙がっている）。

8月15日 日本が無条件降伏を宣言

21日 この日までに各拠点の日本軍は続々と県城に撤退。

25日 孟県城の日本軍が抗日軍民に投降することを拒否したため、晋察冀二分区四団と十九団が孟県城の日本軍に攻撃を開始。日偽軍は西門から側右¹⁶方向へ逃走、一部が潤溝と石人山で滅ぼされ、残りは側石を通過して陽泉に逃走。これをもって孟県全域が解放された。知らせが仙人村に伝わると、村人は駆け回って知らせ合い、喜びに沸いた¹⁷。

大衆抗日組織

「青年抗日救国会」は、39年、党の村支部の指導の下に設立。自動車道路の破壊、電線の切断、傀儡組織への打撃、漢奸の懲罰などを行う一方、「抗敵口社」を結成して革命的演目を上演、大衆への宣伝・動員活動も行った。

「婦女抗日救国会」も39年、党の村支部の指導の下に設立。区の婦女抗日救国連合会の指導も受ける。抗日戦争を支援するために、村の青壮年女性を対象に民校¹⁸での学習活動を展開、文盲の一掃、売買婚の反対、婚姻の当事者決定、男女平等を提唱し、夫や息子の参軍参戦を妻や母として激励する活動を展開した。また、八路軍や遊撃隊のために軍服や靴の仕立てや修繕、傷病兵の慰問を行い、民兵や自衛隊と協力して立哨、見張り、通行証検査、住民の避難誘導、「堅壁清野¹⁹」などに活躍し、辺区政府の表彰を度々受けた。

民兵組織

1938年に創設。当初は「抗日自衛中隊」と呼称した。メンバーは18歳から55歳の村民。偵察班、遊撃班、爆破班があった。40年に改編が行われ、本人の希望に従い、18～25歳の自衛隊員は青年抗日先鋒隊に、26～35歳は模範自衛隊、36～45歳は普通自衛隊、46～55歳は自衛隊に編入した。各民兵組織は村の自衛を担当するだけでなく、しばしば八路軍十九団や地方遊撃隊と協力して敵を攻撃したり、道路や電線の破壊活動を行った。

東会里拠点の日本軍から村を守るために、偵察班は七里路に坐地哨²⁰を置き、日本軍の出発動向を監視した。石頭梁、羊三角、村の入り口の寺廟の三地点に連絡哨を置き、案山子を信号にした。ふたつの案山子が両方立っていれば、何事もない。案山子が一つだけになると、日本軍が東会里を出発、敵に備える準備をすべきことを示した。案山子が二つとも倒れると、敵は既に七里路を通過して村に向かっており、爆破班と遊撃班はただちに戦闘態勢を取ることになっていた。

抗日戦争4年間（1939年8月～44年8月）の被害

『仙人村志』巻末には「日軍暴行録」なる一文が付されており、村の抗日戦被害をこのように総

括して結んでいる。

日本軍は抗日根拠地に執拗に掃蕩を繰り返し、前後48回仙人村を襲った。村民は日本軍の殺戮から逃れるため、たびたび山中や窪地に身を潜め、寒さや飢え、湿気などで腸チフス²¹、皮膚病、梅毒など各種疾病が蔓延し、100余人が死亡、一家全滅もあった。9人が飢えと寒さで死亡、野に屍骸を晒した。57人が逃げ遅れ、日本軍の銃弾や銃剣で殺された。6人が拉致、拷問され、身体障害者となった。4年間で日本軍が略奪した家畜は146頭、豚、羊、鶏、犬などは姿を消し、食料と財物は奪い尽くされた。日本軍の軍靴による度重なる蹂躪の下、仙人村民は深く重い苦難の中にあつた²²。

以上が『仙人村志』に記録された村の抗日の闘いである。冒頭でみたように、東西に走る山脈の隙間の細長い平地にぼつりと取りついた人口わずか千人足らず²³の小さな集落にとっては全村を揺り動かす災難が4年も続いたことになる。

四、聞き取り調査

以下の聞き取り記録に登場する具体的な年代や数量などは、地方史の記録とは食い違う部分も多い。本文の内容に直接関わるため、脚注ではなく本文中に*を付して公的記録を記す。

1. 李志光氏聞き取り記録 2010年9月5日、仙人村村民委員会にて

最初の仙人村調査の際に真っ先に案内された「孟県仙人郷仙人村村民委員会」でお目にかかった（資料10右）。筆者の仙人村調査への対応をして下さった方である。もともと調査対象ではなかったが、村での調査の合間に伺った話が有益であったので、以下に整理する。

李志光氏は、革命委員会主任（1968-76、76-82）、大隊長（82-84）、村委会主任（84-91）、党支部書記第10代（1992～1994年）と、文革期から改革開放期まで26年にわたり一貫して仙人村行政のトップであった。時期によって呼称が変遷しているが、日本で言うところの村長に当たる。国政レベルでの政治理念の大転換も呼称の変化しかもたらさないかのような村政の実情に驚かされる。94年の引退後は『仙人村志』の編纂に携わって来られた。現在、李氏は気管支炎を患っていて、村内を筆者を案内して歩く時も息が上がり、辛そうであった。

資料10 李志光さん(右)と李広栄さん(左)



資料4 「仙人村越雲山 … □□行軍途中」について

山の頂上に見えているのは古い廟。90年代に再建された。周りには廟の塀（围墙）。日本軍がやって来て一晩住んだ。「これはまずい」ということになって壊した。「壊したのは八路軍ですか？」八路軍が壊した。

* 『仙人村志』には、44年春、傀儡軍が越雲山に駐屯するのを防ぐため、県区政府の決定に基づき、各村の民兵が山頂の古廟を破壊したとある²⁴。

李宜春について

仙人村の人間だ。山西なんとか大学で音楽を勉強した。大卒だ。息子が李玉川。既に亡くなった。孫息子が李如斌。陽泉二礦中学で教えている。

「(村人は李宜春のことを悪く思っていないという李広栄さんの話を受けて) 彼は漢奸とは見なされていないのですか？」漢奸に当たるはずだ〔应该是汉奸〕。ただし、血債がない(人を殺していない)

「李宜春はこの村の生まれですか？」生まれたのは村の下の方にある(村民委員会は高台のようになったところにある)昌新院という場所だ。解放後はここ(李志光氏の自宅)の隣の院子に住んでいた。70年代に息子が買った家だ。死んだ時は生まれた家で死んだ。死んで20年になる。死んだ時には70幾つで80になっていなかった。気管支炎で私と同じ。息子も既に亡くなった。

(李志光氏の奥さんが口を挟んで)「頭もいいし、人柄もいい」〔腦子好, 人不错〕。解放後はこの辺りの地方劇を教え、演出をしていた。

彼は両面工作をしていた〔他两边儿办事〕。日本軍の行動について(八路軍に)情報提供をしていた。だからあの老人(李広栄さん)が彼は悪いことをしていないと言うんだ。解放後、彼に処分は無かった〔解放后没处理他〕。

「李宜春は抗日村長だったのですか？」そうではない。彼は党と組織関係はない。

2. 李広栄さん聞き取り記録(第1回) 2010年9月5日、仙人村村民委員会にて(資料10左)

日本軍が仙人村を襲った時に越雲山に拉致された少年が今も健在ということで紹介された。2010年夏、11年春とお目にかかって体験を伺うことが出来た。李広栄さんは1926年11月26日生まれ(調査時は84歳)。ずっと村で農民として暮らしてきたとおっしゃったが、お話を伺っていくと抗日戦争期には八路軍に入り、5年間の従軍経験も持っておられた。

日本軍に拉致された体験について

日本軍に拉致されたのは1942年か43年の8月か、夏だった、収穫〔収秋〕の頃。

日本軍110人、偽軍60人、商会(維持会を指す)7人が東会里から来た。あそこには洋馬山がある。あそこの洋馬山から来た。

村の食料を徴発して、村民20人ちょっとを捉まえた。山の上の廟に連れて行かれ、尋問された。殴ったりはされなかった。「八路軍についてですか？」八路軍について。自分以外はみな大人〔成年人〕で、夜中の3時に皆逃げたが、自分ひとり十数歳で、眠ってしまい、気が付いたら夜が明けていた。日本軍は朝食に米のご飯と…を食べていた。「一緒に食べたのですか？」自分にはくれなかった。朝8時には去った。

* 『仙人村志』には、1942年9月25日に日本軍が仙人村を襲った時には(それまでに何度か襲来している)、越雲山頂を占領し、村民李広栄を連れ去った。仙人村と東庄頭一帯の大量の糧食と財物、家畜を略奪し、10月2日に撤退した、とある²⁵。

その他、抗日戦期に村に起こったこと

日本軍が初めて村に来たのは1939年7月16日。日本人が400人やって来た。朝の7時から10時まで村に居て、県城に帰った。その時の通訳は東北人で、楊という姓だった。村の芝居舞台で銃を三発撃った。

* 『仙人村志』には、日本軍が初めて村を襲ったのは39年8月30日とある。犠牲者が出た襲撃と区別してのことかどうかは不明である。

日本軍が村に来たのは全部で十数回。この村で殺したのは13人。八路軍と疑って。自分の祖父と母方の祖父母の3人が殺された。祖父は59歳で、母方の祖母は銃殺。母方の祖父は井戸に投げ込まれて殺された。

* 『仙人村志』には、日本軍は42年から45年秋に日本軍が投降するまでの4年間、計48回仙人村を襲ったとある。

「日本軍がそんなに村に来たのは八路軍が村に居たからですか？」八路軍は村の中にはいず、15里離れたところに居た。

資料3 李宜春親子について

「これは誰かご存じですか？」李宜春だ。一緒に写っている息子が李玉川。既に亡くなった。娘は李玉娥82歳。陽泉に住んでいる。

李宜春について

商務会長になった。日本人に協力した〔投靠日本人〕。「なぜですか？」教育水準が高くて、才能があったから〔因为有文化, 有才干〕。「村の人はこういう対日協力者をどう思っているのですか？村の人に良くしてくれた。(だから)寛大に(扱われた)。共産党は処分しなかった〔对待本地人不错〕〔寛大。共産党没处理〕。太原に二年行っていたが、病気になり村に帰ってきて、野良をやっていた。

資料2 「東会里維持会員」について

(李広栄さんは全員を知っている様子)楊鸞儒は処罰〔鎮圧〕された。彼は悪い。土地の住民のためになることをしなかった〔他不老实。不给老百姓办好〕。傳徳星・徳崇は解放後に教員になった。兄弟だ。「維持会員になった人たちはみな教育水準が高かったのです

か？」そう。「村の人たちはこういう対日協力者をどう思っているのですか？」ある人たちに対しては印象は悪くない〔对有些人印象不坏〕。

3. 李志光さん聞き取り記録（第2回） 2011年4月7日、仙人村の李志光氏宅にて

この時は事前にお約束をしていたので、襟元までボタンを留めた人民服に帽子という正装で現れ、驚かされた。主に第1回の聞き取り内容の確認を目的として行った。

この調査時にはアテンドの趙潤生氏（孟州政府職員）、李晶明氏（孟州政府職員・仙人村出身）、仙人村の受け入れ窓口李志光氏（仙人村老幹部）が同席した。

拉致された時の状況

1941年の秋に日本軍が村に来て越霄山に連れて行かれた（『仙人村志』記述との齟齬については第1回参照）。植え付けの頃〔種地的時候〕²⁶に日本軍が村を襲い、村人13人が山に連れて行かれた。それぞれが働いていた畑から連れて行かれた。日本軍は村に視察（あるいは偵察）にやって来て〔来看看〕一晩泊まった。それで雑用をさせるために連れて行かれた。炊事など。自分は10歳だった（15歳のはず？）が、他の人たちは大人で途中で逃げ出した。（自分は）朝に連れて行かれ、一晩居て翌朝に逃げ出した。

「山の上では拷問されましたか？」殴ることも尋問もなかった。

「山では命の危険を感じましたか？」そんな考えはなかった。山の上には李宜春や李□□が居た。村の人間が居たから怖くなかった。

「日本軍に連れて行かれて戻ってこなかった人はいましたか？」十数人が戻って来なかった²⁷。

「日本軍はその時は東会里の維持会と一緒に巡視に來ただけなのですか？」（東会里からだけでなく）孟县城と東会里から日本軍100人余りがやって来た。軍用車両20台で。村に糧食を出せと。とうもろこしだ。

「代金は払わない？」まさか。ハハ…「殺し尽くし奪い尽くす」（筆者注：三光政策）というのに。

山の上では食事をさせてくれなかった。一日食事にありつけなかった。日本軍はコメのごはん〔大米〕を食べていた。日本軍が水風呂に入っている時に逃げた。

親族の死の状況

祖母〔奶奶〕が享年53歳。1942年にこめかみを撃たれた。村に日本軍が来た時に逃げたが、中庭に出たところを民兵を追っていた日本兵に撃たれた。

祖父〔爷爷〕は享年50歳。教育を受けていた。1941年、日本軍が来た時、スローガンを書かされた（教育を受けていて、字が書けたため）。途中で逃げ出して捕まり、井戸に投げ込まれて殺された。家族は遠くに連れて行かれたと思っていたが、死後半月（15日）も経って

から発見された。

抗日戦争期の村の生活について

連絡員

日本軍は村ごとに連絡員〔情報員〕を出させた。八路軍の動静を報告させる。「それは日本軍が指名するののか、村で選ぶのか」日本軍の指名ではなくて、金を出してひとを雇う。（趙潤生氏）村長だの維持会長だのが日本軍の命令を受けて、村でどの家から出すか指名するが、金のある家、気の弱い者はやらない。金がある者は金を出して、度胸のある者を雇って代わりをさせる。

度胸がある者は金が目的でやる。気の弱いのはやらない。日本人に殺されるのが怖い。（李晶明氏）八路軍にやられるのも怖い（笑）

（趙潤生氏）両面ある。連絡員というのはつまり漢奸だから〔当情報員不就是漢奸的名義了〕。

日本語

12歳から16歳の青年は男も女も（筆者注：日本軍拠点がある）東会里へ出かけて訓練させられた〔受訓〕。（トーチカのある）羊馬山で訓練した。日本語を学ばせられた。週に2回行った。「東会里に学校を設けたんですか？」学校ではない。臨時の場所で日本語を教えるだけ。学校がある訳ではない。

使役

村人は（隣村の東会里にある）羊馬山まで行かされ、使役をさせられた。家や見張り台やトーチカを作らされた〔修家、修哨楼、修砲楼〕。

抗日戦勝利の頃

「日本が降伏した時はおいくつでしたか？」

18歳で村を離れ（1943年？）八路軍に入った。5年間軍に居て、48年に村に戻った。

「日本が降伏した時はどんなお気持ちでしたか？」

降参した！華北に平和が来た！みな日本人が出ていくのを、日本人が降参するのを待ち望んでいた〔盼日本人走、盼日本人投降〕

日本の若者に伝えたいこと

（同席した地方幹部が日中友好の常套句を促す中…）

（李志光氏）子供たちはこれからは世々代々平和に、戦争のない世の中に。

（趙潤生氏）日本の若者に…たとえば「日本軍は中国を侵略すること八年」…まあ、自分の言葉で話してみて。…次世代の教育のために。

日本人は八年も中国を侵略した。死者が出た集落は52か、とにかく大変な数の村で犠牲者が出た。その政策は「殺しつくし焼きつくし奪い尽くす」（筆者注：三光政策）だった。（それに）「華を以て華を治む²⁸」政策で中国人に中国人をやっつけさせたのは悪辣だ。（こん

な話は)もうよそう。

(趙潤生氏) (復唱を促しつつ)「日本の若者たちに希望することは…」

…中略(李老人は山西日本軍の一部が降伏後も内戦に加担した「山西残留問題」を非難)…

あなたたち日本人は…とてもひどい。中国を滅ぼそうとした。わしらは頑強に抵抗すること八年、ついに日本を降参させた。わしら中国に志気があったからだ。でなけりゃ日本の人殺し[日本鬼子]は出て行かなかっただろう。中国が偉大だってことだ。日本は正義に背いて中国を侵略した…もうよそう。

(趙潤生氏) (復唱を促しつつ)「日本の若者たちに希望することは…」

いまの中国の若いもんは…平和の中で育っているから…テレビを親でも車に乗ったり飛行機に乗ったりして…日本人が中国を侵略したことを…(聴解困難)…

(趙潤生氏) (復唱を促しつつ)「若い日本人に希望することは…」

(李志光氏) (復唱を促しつつ)「日本の若者たちには今後は…」

日本の若者たちに希望することは、今後は中国には友好的にしてほしい。中日友好を！経済でも互いに交流して。日本の大地震では(中国の支援について話す)…中国は世界平和のために大いに力を尽くしている…もうよそう。

(趙潤生氏) (復唱を促しつつ)「中日がいつまでも友好的でありますように！」

中日がいつまでも友好的でありますように！(日本の若者は)あの八年(日中戦争)のああいふ態度を手本にしないで欲しい。

4. 李玉娥さん聞き取り記録 2011年4月8日、陽泉市にて

資料3で李宜春と一緒に写る長女の李玉娥さんが健在であると2010年秋の仙人村調査で知り、11年春の現地調査では事前に聞き取りの打診をしておいた。李玉娥さんは仙人村の南約40キロにある陽泉市(かつて旅団司令部があった)にお住まいであった。孟県城から車で陽泉市に向かう。アテンドの趙氏が捜し出した孟県政府宣伝部の李晶明氏が李玉娥さんと一族で、そのついでで連絡がついたものであった。

陽泉への車中、趙氏から「彼女は当初大変強硬で、親戚である李氏には会うが日本人には会わないと言った。なんとかなだめて、あなたが[認錯](過ちを認めて謝罪)すれば会うことになっている」と告げられる。筆者が

資料11 李玉娥さん(中央)の聞き取りの様子



「先方が嫌がる場合は無理強いしない。漢奸の嫌疑がかかるような話題だから日本人が来るのは心理的負担が大きいのだろう」と答えると、趙氏は「あなたがちょっと犠牲になって、謝罪の言葉を言えばいいだけ。漢奸の件は私が説得する」と応じた。「会ったこともないのに何を謝罪するのか」と不快に感じたが、「日本人として被害側に遺憾の意を表明してほしい」という意味であるのは分かったし、とにかく李宜春の後代に会ってみたいと思い、「踏絵」を踏む覚悟を決める。

陽泉では、聞き取り調査場所となったアパート近くの歩道に李玉娥さんの息子さんが出て待っていた。緊張と警戒感を感じさせる表情であった。趙氏が車から下りて、早速の「説得工作」か、李宜春を党が評価している県史の文章を彼に指さしながら見せる。それが済むと2、3分ほど歩いて古いアパートへ。李玉娥さんの住いと思っていたが、後で録音記録を読むと「私は来たくなかった」としきりに言っているの、そこは息子さんの住いで、普段は別の場所にお住まいのようだ。

李玉娥さんは痩せて小柄な老婦人であった。筆者を紹介されて「日本人に会うのは怖かった」と言ったようだった。それから筆者に飛びかかるように向かって来て、首に手をたたきつける動作をし、「こうして首を切った」。それから筆者の左右の頬をぶつ真似をして、「こうして叩いた」と言った(と思う)。続いて、身振りを交えて、高いところから突き落とすような話になった。日本軍の行状を訴えたのだろう。後で「なぐられたのですか?」と尋ねると、「私は足が速かったから逃げた」と少し笑みを見せながら言った。「私は纏足していなかったから」。このため、首を切るはもちろんであるが、突き落とす、殴るなども自身のことではなく、目撃や伝聞かもしれない。とにかく、初対面の挨拶もしないうちの急展開に面食らい、早口の方言音であったため不明点が多い。

筆者からは車中での要望に応じて前口上。「お目にかかれて光栄です。日本人にはお会いになりたくないところを、特別に受け入れて下さり、心から感謝します。かつて日本は中国を侵略し、あなた方ご一家をはじめ、多くの中国人民に多大な苦しみを与えました。皆さんの苦しみに対し、かつて中国を侵略した日本の後代として深くお詫びします」。筆者が用意したのはこのような台詞であったが、李玉娥さんは共通語がよく分からないのか、特に反応を示さず、自分の話をし始めた。筆者の態度表明は周りにとってより意味があったようで、「かつて日本は中国を侵略し」と言ったところで、息子さんが「そうそう侵略なんだよ!」と強く反応した。日本は侵略を認めていないといった類の情報に怒りを感じていたようだ。趙氏、李氏、それに李氏の姪が3人がかりでこの様子を撮影してフラッシュが盛んに光る。

その後も李玉娥さんは興奮気味に早口で多くのことを話し続けたが、筆者には殆ど聞き取れなかった。以下は後に録音を文字起こしてもらって理解できた内容である(上記の場面には録音が間に合わなかった)。

聞き取りをお願いしたところでの最初の発言

二度と中国に侵略に来ないでくれ! 誰にも二度と中国を侵略させるもんかね!

あの頃は逃げて逃げて、ああ、ほんとにどんなに走ったことか。捕まれば殴られる(から)。もう(あんなに)走りたくない。あの頃は足は血豆だらけ。日本人が来たとなると、

すぐに走り出して、逃げて逃げて…もうどこに逃げたらいいか…

李玉娥さん自身について

「かぞえて85歳、満84歳、うさぎ歳」とのことであるから、1927年生まれで、圭川が訪れた1942年には15歳だったことになる。日本軍が村を襲った時の恐怖について興奮気味に語ったが、纏足していなかったから逃げ遅れたことは無かったという。小学校2年生の時に児童団(八路軍が組織した抗日大衆組織)に入り、村々で宣伝をした。児童団の話になると抗日歌を歌い出した。「日本の鬼はひどい♪中国人に中国人を苦しめさせる♪」

父、李宜春について

当時、家族は仙人村に住み、父は東会里で日本軍の仕事をしていて、行ったり来たりしていた。仙人村に帰ると、八路軍に漢奸の様子など状況報告をしていた。

「お父さんについて覚えていることは？」こんな歳になって何も覚えてない。「おばあさんに優しくしてくれましたか？」そりゃあ優しくかった！…父は死んでもう37年になる。68歳で死んだ(1974年死去と思われる)。

資料3 李宜春親子3人について

「(この写真を撮影した)1942年頃は何歳くらいですか？」知らない。「この日のことは覚えていますか？」覚えてない。…(弟が拾った銃弾で手の指を怪我した話を始める)…(趙氏)「写真でも分かるね」私は見ない、見たくない…。(李氏と趙氏が代わる代わるに)「これはあんたじゃないか。とぼけるのかい？」知らないって言ったら知らない…。(息子さん)「弟も死んでいるし、父親も他界した。哀しいから昔のことは話したくないんですよ」

父、李宜春の維持会長としての苦勞

「お父さんから何か苦勞話を聞いていらっしゃいますか？日本軍と村との間に入ってご苦勞されたと思いますか？」そりゃ苦勞した。間に挟まれて、日本軍(原文[鬼子])は怖いし、八路軍に疑われるのも怖い。とても危ない。中国人なのに日本人のために働いて、もし八路軍に知られたら首を切られる。(息子さんが聞き取り前に趙氏から見せられた県史の文章に基づいて)「…維持会長になったのは八路軍の指示なんだ。時には日本人を使って漢奸をやっつけたりもしたんだよ」

日本軍の記憶(聞き取り中の切れ切れの発言から)

「抗戦八年、たくさんの中国人が殺された」「日本人が村を襲った時は怖くて怖くて…」「日本侵略軍はとてもひどかった。掃蕩に来て人を捕まえられない、物を盗れないと、大便をして、それを紙で包み、神棚の前に置いたり、台所の瓦甕(糧食を入れる容器)の中に入れた。そうやって村人を侮辱した」「日本軍の中にもいい人悪い人がいた。(父・李宜春のことか)その悪いのを誘い出して、八路軍にやっつけてもらった」

小一時間経ったところで次の予定のために急かされながら、ようやく切り上げた。息子さんは到着した時の歩道まで見送りに出て来た。発車する時にこちらに視線を向けて会釈した彼と目が合った。

むすびにかえて ～回を重ねてようやく少し見えて来たこと～

筆者にとって中国との往来は長く、日中戦争の記憶についてもそれなりに分かっているつもりがあった。しかし、内陸の僻村まで自ら出かけて行ったとしても、筆者が直接意思疎通できる(共通語を話せる)人間は一定の教育水準と社会経験を有する人間である。訪問や調査を重ねても「日中友好」の外交的建前の枠内でしか接触できていないことに、調査を重ねてようやく気づくことが出来た。

農村に入り、高齢の農民、更に女性というように、受けた教育水準や社会経験が少なくなると、政治的発想から相対的に自由になり、より本音に近い言葉が聞けるようだ。心の底にある割り切れない感情に接することが出来る。調査の最中ではまだ現地語での発言を具体的に理解できてはいなかったが、飛び掛られたり、首を切る真似をされるという反応に接したのは初めてで、やはり衝撃を受けた。

帰国後に録音を日本に在住の山西方言を解する中国人に起こしてもらう機会に恵まれ、中国流の政治的建前で濾過されていない実情が垣間見えた。その方は日本人と結婚して二十年近くを日本で過ごしており、日本での仕事を通じて、依頼者はその場の状況をありのままに知ろうとすることであろうことを理解してくれたのである。これまで行ってきた調査では日本人－中国人の間、現地語と共通語の間に介在する通訳や録音の文字起こし作業において無意識に行われてきた“調整”があったであろうことにはっと気づかされた。

聞き取り対象者の言葉に混じる恨みや反感など“政治的自覚のない”発言は同行する地方政府職員によって政治的に正しい方向へ“修正”され、断片的な語りは知識人によって論理的合理的に“補正”が施されてしまう。これまで文字起こしを依頼してきた山西省在住の中国人も主に質問と回答のやり取りを追うことに着目し、発話者の素朴な表現よりもアテンドする役人や知識人の論理的合理的な表現を採用し、“友好的”でない感情の発露も“剪定”していたようだ。

李広栄さんの話は方言がきつく、その場では殆ど分からなかった。録音を文字に起こしてもらうと、同行の役人たちがお定まりの日中友好の台詞をしきりに促す中、とつとつと日本への恨みを述べている。それでも同行の役人氏本人が後日「あの老人にしても日本人に対しては遠慮して発言している」と注意を促した。手配の行き違いで彼とちょっとした感情的やり取りをした後であった。行程が順調に行っていれば耳にすることも無かつただろう。

李広栄さんへの初回の調査では、筆者がお暇の挨拶で親族が殺されていることに対する悲しみの気持ちを伝えた時、老人は「環境が引き起こしたことです」「今は中日両国は友好関係にありま

ず」と「応じた」。筆者はこの程度の言葉も対面で口に出来たのは初めてのことであったので、老人の「立派な」受け答えに感動したものだ。が、こうした“周辺状況”が分かってみると、それはアテンドした県政府職員の口を介したものであり、一農民の実際の表現は適当に脚色されている可能性もあることによようやく気づいたのである。

小稿の最後に収録した李玉娥さんの聞き取り調査は筆者にはもどかしいものであった。李玉娥さんの方言を直接聞き取れない筆者はその場に居ながらその場で進行している事態を理解できず、彼女の息子さんが筆者に共通語でしきりに話しかけるのを聞き取りの邪魔と感じ、李玉娥さんを自分の方に向かせるアテンドの趙氏に不満を感じていた（資料11）。正直に言えば、調査当日朝からの経緯と現場での針の簾状態とに緊張し、不信心と不快感さえ感じていた。しかし、録音記録を読んで、ようやく周囲で進行していた状況が見えてきた。

彼女はしきりに日本軍占領下の恐怖を語っている。興奮状態である。当時のことを聞かれること、話すことを非常に嫌がっている。日本人にそれらを質問されるということがまた嫌だったようだ。息子さんは母が嫌がっている訳を筆者に解説し、趙氏は嫌がる彼女をなだめて、「日本人には話さなくていいから私に話さないよ」と彼女の相手を務めていたのだ。その場に居ながら日本人として“配慮”され、蚊帳の外に居る状況をはっきり知ってみると、これまでの調査でも似たような“配慮”を受けたのであろうと思えば当たる場面は少なくない。

生身の感情が国家が示す外交方針や政治的総括の枠内に収まらないことは当然のことである。しかし、たとえ実相を知ろうと現地を自ら歩き、ひとびととの直接対話を試みても、日本人に見えること、耳に入ることには大いに限りがあることを調査を重ねて改めて思い知ることになった。しかし、限界に気づくこと、見えていないものがあることに気づくことは、知ることへの貴重な接近であるかも知れない。

資料出典

資料1 石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力 大娘たちの戦争は終わらない』創土社、2004年、133頁より作成。

資料2 東会里維持会との記念撮影。裏書に「東会里差務股長 維持会長 李宜春敬贈 郭梅林（以下全7名の男性名）」。他の写真の裏書から東会里村村公所前と確認できる。撮影地点や被写体が共通なことから、昭和17年10月26日撮影の可能性が高い。

資料3 東会里維持会長李宜春と二人の子供たち。裏書に「田宮隊長大人恵存 股長李宜春敬贈」とある。状況から昭和17年10月26日撮影の可能性が高い。

資料4 裏書に「仙人村越霄山 昭和十七年十月二十七日 □□行軍途中」とある。

資料5 仙人村集落から越霄山南側斜面を登る。台形になった山頂の形状や廟の位置などが資料4に重なる。10. 9. 5 筆者撮影

山西省孟県仙人村調査報告～「個人史から考える日中近現代関係史」の一環として～（田宮昌子）

資料6 裏書に「昭和十七年十月二十七日“仙人村越霄山 標高一〇五六ヨリ敵ヲニラム」とある。ただし、越霄山の標高は『仙人村志』（4頁）によると1311メートルである。

資料7 越霄山頂から北面を見渡す。2011. 4. 7筆者撮影

資料8 裏書に「説明ヲ聞ク我輩」とある。泉アルバムに同じ写真があり、「東会里仙人村」と添書きがある。真真中で指差するのは部下で、説明を聞く本人は右より帯刀の人物と思われる。

資料9 越霄山頂から南面の仙人村を見下ろしつつ右手に降りる。資料8とアングルが重なるようだ。後姿はアテンドの陳計生氏（孟県政府職員）。2010. 9. 5筆者撮影

資料10 李志光さん（右）と李広栄さん（左）。仙人村村民委員会にて。2010. 9. 5筆者撮影

資料11 聞き取りの様子。右から李玉娥さんの息子、田宮、李玉娥さん、アテンドの趙潤生氏（孟県政府職員）。2011. 4. 8筆者撮影

巻末注

¹ これまでに出た取材・研究成果の一部を挙げると、石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力 大娘たちの戦争は終わらない』創土社、2004年、内海愛子・石田米子・加藤修弘編『ある日本兵の二つの戦場 近藤一の終わらない戦争』社会評論社、2005年、班忠義『ガイサンシーとその姉妹たち』梨の木舎、2006年、米濱泰英『日本軍「山西残留」』オーラル・ヒストリー企画、2008年、尾西康充『田村泰次郎の戦争文学—中国山西省での従軍体験から』笠間書院、2008年などがある。

² 「個人と家族からみる日中近現代関係史—山西省孟県訪問報告—」『国際宮崎研究平成18年度報告書』宮崎公立大学地域研究センター、2007年7月

³ 孟県史志編纂委員会編『孟県志』方志出版社、1995年、77頁

⁴ 撮影は圭川側が行ったはずと思われるので、李宜春に贈られたものに署名して、更に李宜春が圭川に贈ったものだろうか。

⁵ 資料6「敵ヲニラム」より約8名多いのは、資料4「行軍途中」では荷物運びなどの現地住民が混じっているのかも知れない。

⁶ 仙人村志編委会『仙人村志』（草稿）6頁

⁷ 故山本泉さんの個人アルバム。山本さんは山西省従軍期の圭川の部下で、カメラを持参して従軍し、夥しい量の戦地写真を残した。本稿では「泉アルバム」と呼称する。

⁸ 仙人村志編委会『仙人村志』（草稿）、1頁。何年度の数値が示されていない。「前言」に記載内容は1995年末を下限とする とある。

⁹ 仙人村志編委会『仙人村志』（草稿）。編纂事業は村の共産党支部の指導下であり、仙人村に党組織が出来た抗日戦争以降が主な叙述対象となっている。

¹⁰ 「減租減息」とは小作料と利息を引き下げること。過去に農民と地主間に結ばれた小作証文や利息証文を全て抗日政府が統一的に印刷した新証文に更新する。内田知行「山西省孟県における日本軍占領統治と抗日

運動」石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力』創土社、2004年参照。

- ¹¹ 中国人民政治協商会議山西省孟県委員会文史資料研究委員会編『孟県文史資料』には、40年9月に東会里拠点から県城に撤退した日本軍が再度東会里を拠点化するの41年9月3日とある（11頁）ため、41年5月の時点で拠点に居たのは偽軍のみであったと思われる。
- ¹² 前掲『仙人村志』巻末の「附：日軍暴行録」の記載では日付や被害の細部などに異同がある。それによると、「10月6日 晋察冀二分区“火線劇社”が九一八事変十周年を記念する演目を仙人村で上演。翌日、日本軍は村の東から村内に侵入し、佛源寺、家廟、民家など660軒を焼き払い、密洞口口を破棄し、たんす120竿、衣類三千余着を略奪、村人李金口、李口明、李先富父子を殺害、李雨和、李冬成2名を拉致した」。
- ¹³ 40年の百団大戦の後、日本軍は抗日根拠地への掃蕩作戦と経済封鎖を実施、抗日根拠地は苦境に陥り、41～42年は「抗日困難期」と呼ばれる。孟県の抗日県政府の行政再編も日本軍によって県内が掌握され、域内が分断された状況に対応したもの。内田、前掲論文および前掲『孟県文史資料』参照。
- ¹⁴ この日、日本軍が撤退したのは、前掲『仙人村志』（7頁）では「県城」とするが、前掲『孟県文史資料』（11頁）では「牛村」としている。
- ¹⁵ [完小]とは[完全制小学]（全日制）の略。[夜校]（夜間学校）[半工半読]（社会人教育）に対する呼称。
- ¹⁶ ここの「側右」と次の行の「側石」は同地点であると考えられるが、地図上に見当たらないため、どちらが正しいか判断できない。
- ¹⁷ 以上、仙人村の「抗日戦期の展開」については、前掲『仙人村志』P4～7までを抜粋翻訳したものを基本とし、『仙人村志』巻末に付された「附：日軍暴行録」の内容を加えて作成した。
- ¹⁸ 「民校」は、成人教育、特に識字教育を目的として農村に設置された教育機関。前掲『仙人村志』には、小学生が「小先生」として直接家庭に派遣され字を教える等の活動が紹介されている。
- ¹⁹ 陣地を死守して敵の進攻をはばみ、退却に当たっては一切の物資を埋蔵または焼却して敵の利用を妨害する戦術（愛知大学中日大事典編集部編『中日大辞典』中日大辞典刊行会1968年）
- ²⁰ 見張りを置く地点。「立哨」に対し、座って行う見張り地点と思われる。
- ²¹ 原文は「傷寒」。腸チフスの他に、暑さ寒さによって起こる諸病気を広く指す場合もあり、後者の可能性も否定できない。
- ²² 以上、仙人村の「抗日戦期の展開」については、前掲『仙人村志』P4～7までを抜粋翻訳したものを基本とし、『村志』巻末に付された「附：日軍暴行録」の内容を加えて作成した。
- ²³ 建国初期の村の人口が千人近くとされている（前掲『仙人村志』16頁）
- ²⁴ 前掲『仙人村志』6頁
- ²⁵ 前掲『仙人村志』6頁
- ²⁶ 第1回では「収穫の頃」と言っている。その方が季節には合うようである。
- ²⁷ 何時のことか、抗日期を通してのことなのか、事実関係をはっきり確認できていない。
- ²⁸ 原文は「以華治華」。日本軍が直接的な支配から間接的な支配へと現地化を図ろうとした政策。現地では「中国人に中国人を抑圧させる」面に反発が強く、日本の占領支配の悪辣さを示す代表例として言及される。